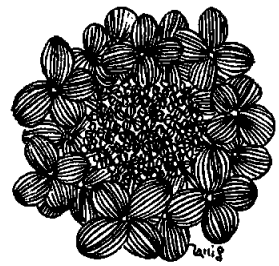

北の旅

湊　正雄

夏のストックホルムの夜は明るい。めったに星も見えない。そこは北緯六十度に近く白夜がつづくのである。

一九五九年に八月も半ばをすぎてから、北極圏に行ってみたくなった。ストックホルムの忙しい生活から解放されて、一人でオスローからトロニエム、ナルビク、ノルドカープとスカンジナビヤの西をまわり、カラショクからフインランドにはいり、ラップランドのロバニエミに下り、ヘルシンキにでて、船でストックホルムに戻った。

汽車とバスをのりつぎ、陝湾をいちいち連絡船でわたるという、いそがしい旅であった。そのうえ、地質図と説明書を手にしながら、車窓からは、いつも露崖を眺めたり、写真をとったりし、車が止まるごとに岩石を採集するという、はなはだ不趣味な旅であった。それでもいま、思いだすとなつかしい。

壮大なU字谷。ラップ人の門。深い海と漁師の家。網をつくろう老人と美しい娘たち。頭におおいかぶさるような石灰岩の断崖。ラップランドの高原。残雪とわら色の草原。はてしなくひろがるシラカバの林。海のような湖と花崗岩の島々。ついで急流とタンネの森。やがて、たくましい農夫のいる牧場といったものが、つぎつぎに頭のなかを駆けぬけてゆく。

これをせんじつめると、美しい自然と、それにとけこんでいる人の生活といったものになると思う。別のいいかたをすると、スカンヂナビヤは、どこにいっても原始といったものは残っていないらしいが、人々に強く自然を感じさせるところだといえそうである。

そこは、事実、北緯七十度を越えて、北極海のみえるところまでいっても、人くさいところなのである。最涯まで、牧場や漁村がみえがくれしており、その意味では、若いときに、しばしば訪れた中部千島などにくらべても、はるかに拓けたところなどである。

ところでアイスランドなども、行ってみると、かなり人くさいところのようだ。スピッツベルゲンなども、漁業の基地や石炭の積み出し港といったところが目についてノルドカープ近くのハンメルフェストのにぎわいと、あまり変らないそうである。

グリンランドでも、簡単に行けるところは、軍事基地みたいなものが、前面におしだされていて、がっかりする由である。

欧洲の僻地、スカンジナビヤの北の涯から、北極海にひろがる島々においても、すでにこのとおりだとすれば、私どもは、はたして原始の姿をどこに求められるのであろうか。

ヒマラヤに行ったことのある橋本誠二氏の話では、ヒマラヤも、とんでもなく人くさいところで、ベースキャンプ近くまで牧舎や僧院や、傾斜した畑がつきまとってい

るという。こういう意味では、日高山脈の冬のほうがずっと原始的であり、ましだということである。しかし、その日高も、いまでは電源開発や造材のために、沢という沢に道がついてトラックが走っている。

□

では、自然について、私どもは、もはや絶望しなければならないだろうか。私はそうは思わない。スカンヂナビヤでも日高でも、道路をはなれて、一歩、森や草原にふみこむならば、そこには、なお多く原始が広く残されているのである。

では原始や自然は、辛うじて、そうした未開の地域に、残っているにすぎないだろうか。それは、一面において、たしかにそういって差しつかえないどころか、真相でもあろう。

事実、人間は、その長い歴史を通じて、自然をきりひらいて自分たちの生活の舞台としてきた。畑も、田も、道も、鉱山も、ダムも、道路も、都市も、いわば活動の必然の結果であり、辛うじて残っている原始境も、手を加えることは経済的に成りたたないから放置されていたにすぎないところであろう。

では、われわれは、そうした、とりのこされた自然にしがみつき、そこだけを原始境だといいはり、その限られたところに特別に、さくを設け、人をいれないようにすれば、自然は守られるであろうか。そうして、その自然なるものは、ごく限られた人々、親のスネカジリの学生や特別な有閑の人々のみに、ひそかに解放され、自然を味わうことの楽しさがわかってもらえればじゅうぶんなところであるといえるであろうか。

現状では、それも致しかたないところであるかも知れないが、理想からははなはだ遠いことのようだ。

ここでは、自然とは何か。原始とは何かといったことでひらきなおる気持はない。ただ私は、おそろしく人くさいところでも村や町であっても、人々は自然を感じ、特別な旅行者だけではなく、住んでいる人々も自然の美しさにいだかれて美しい風景のなかに生活しているところがあるといいたかったのである。

ドイツは、すみずみまで拓かれたところで、森も川も、平野も丘も、山も人の手のはいらなかったところを探しだすことは、もはや完全に不可能である。しかしそこでも、いたるところに鹿狩りのできるような森が残されているのである。これは、いったんは拓かれた原野の一角を、鳥獣保護のために放置し、森林を復活させた結果である。

アルプスも、おそろしく開けたところである。山の牧場はいたるところにあるが、それは観光客?のためにあるのではない。そこには日本流の離農といったものが、くりかえされて、いま生活が成り立つようになって、存在しているものにすぎない。そのあたりには、もちろん原始というものは失われている。それでも森や急崖や草原、牧舎といったものが、自然を感じさせるのはどうしてであろうか。

山の牧場をこえて、二、〇〇〇から二、五〇〇メートル近くの山陵にのぼってみよう。カーニシェアルペン・ユリシェス・アルペンといった石灰岩の山々は、岩は美しいが峠道がたくさんについていて、みな舗装されている。森だって、いったんは、切られたものであり、植林されたものすらある。それでも美しい風景が再現されているのである。

原始性にすがりつくことだけが自然を大事にしたり、美しい風景を守ることには必ずしもならないのである。

原始境というものがもしあれば、あるいはそれに近いものがある限り、それを大事に残さなければならないことはもちろんである。その反面に、人の住んでいるところにさえも、美しい風景がかもしだされるような配慮がない限り、真の意味の自然保護は不可能であるような気がする。

□

私は田園にも都市にすらも、やりようによっては自然が生かされ、美しい風景がいたるところにくりひろげられるようになるに違いないと思う。いかに人くさいところでも、それは可能であると信じている。

また、このようになった暁には、自然保護はゆきわたるし、結果として風景をうりものにしたり、自然のめぐみ、たとえば温泉を特殊にうりものにした、いわゆる、観光地というものはなくなる運命にあると思う。形が変わるであろう。

高速道路、美しい森にかこまれた住宅街、ゆたかな田園と牧場。清い水の川と湖。輝かしい都市。近代的な工場や鉱山。ツルや白鳥やガンが、人をおそれないでいたるところでみられるような北海道。観光地なき観光地。いたるところが美しいがゆえに、観光地といったもののない北海道。どこでも自然を感じられる北海道。

そういうものとして、北海道が発展することを望む次第である。

（北大理学部教授・地質学）